

令和 2 年度 青森学術文化振興財団助成事業報告書

鮫神楽の伝承・発展と地域の振興に関する研究事業(2回目)

令和 3 年 2 月

青森大学社会学部 木原研究室

巻頭言

この報告書は、令和2年度青森学術文化振興財団助成事業（地域の振興に係る研究【一般】）において、昨年度から引き続き「鮫神楽の伝承・発展と地域の振興に関する研究」をテーマとした事業の成果をまとめたものである。また、鮫神楽と地域を対象とした事業が3年目を迎えたため、過去2年分の事業内容を振り返り、一定の結論を出す内容ともなっている。

まず平成30年度（1年目）では、鮫神楽保存会、連中、そして伝承生の語りから、鮫神楽を伝承していくための取り組みや課題が明らかとなった。また、各方面から出演の依頼を受け、鮫神楽の外で演じる機会が増えているということもわかった。その結果、観客に「魅せる」、あるいは「みられる」ことが強く意識されるようになり、現在の鮫神楽は少しずつ変化しているということが明らかとなった。

次に平成31年度（2年目）では、第一に「若者の力」をキーワードに掲げ、芸能の伝承と地域の振興について考えた。そこでは、大学生の畑中氏が神楽に熱い気持ちを持った同年代に声をかけ、盛り上げていける集団をつくる、という新たな取り組みを始めようとしていることが明らかとなった。まさに「若者の力」が発揮される場であろう。また、第二として、既に神楽で地域の振興に力を入れ、一定の成果をあげている島根県益田市で実地調査を行い、そこで伝承されている石見神楽に焦点を当てた。そこでは、観光協会、神楽団体、各地域の町内会や自治会、さらには子ども会が一体となって神楽を支え、地域の活性に力を入れていた。このような支えの構図を今後、鮫町や鮫神楽にも取り入れることが重要であるという結果となった。

そして今年度（3年目）は、「地域コミュニティの再考」をテーマとして、主に教育機関に注目した。鮫小学校には2年ほど前まで授業としてクラブ活動があり、そのなかに「神楽クラブ」があったことがわかった。1週間に1度、鮫神楽保存会の方々が直接児童に教え、発表会等も開催されていた。また、八戸市第二中学校では、「立志式」に鮫神楽を呼んで演じてもらうという初の試みもされていた。

以上のことから、神楽の伝承と地域の振興を目指そうとする場合、それらを単体で考えるのではなく、それぞれがどのように繋がりながら支え合う仕組みができているのかを明らかにする必要があることがわかった。そして、その繋がりと仕組みを強化することで、結果的に両方を達成できるのではないだろうか。

最後に、この3年間の成果を収めることができたのは、青森学術文化振興財団の助成金をはじめ、調査に協力していただいた方々、青森大学の理解によるものである。心から感謝申し上げたい。ありがとうございました。

令和3年2月28日
青森大学社会学部
木原 博

目次

I 過去2年間の事業内容と成果.....	1
①平成30年度（1年目）.....	1
・鮫神楽の現在.....	1
・対談からわかったこと.....	4
②平成31年度（2年目）.....	4
・石見神楽の実地調査.....	5
・ワークショップ.....	7
・畑中氏の取り組み.....	8
II 鮫神楽と地域の繋がり.....	9
・墓獅子.....	9
・史跡根城祭り.....	11
・鮫小学校の「神楽クラブ」.....	15
・八戸市立第二中学校「立志式」.....	18
III 総括.....	20
【資料編】.....	21

I 過去 2 年間の事業内容と成果

①平成 30 年度（1 年目）

この年は、鮫神楽の方々の語りと関連資料をもとに、鮫神楽の歴史を把握するとともに、今を生きている鮫神楽の姿を記述することを事業の主な目的とした。また、鮫神楽とは芸風の異なる島根県益田市で伝承されている石見神楽にも注目し、石見神楽保存会久城社中座長の神田惟佑氏を招聘し、柗谷伸夫会長とともに「【対談】今を生きる神楽を語る ー鮫神楽と石見神楽ー」を開催した。

・鮫神楽の現在

ここからは、当時収めた報告書¹をもとに、現在の姿についてまとめておきたい。なお、鮫神楽の歴史については、令和 2 年度の調査内容の分析とはあまり関連性がないため省略する。

鮫神楽は「保存会」「連中」「伝承会」の 3 つで構成されている。まず「保存会」の会長は柗谷伸夫氏であり、出演依頼を受けたり、本番に向けての稽古の日程を調整したりする役割がある。次に「連中」とは、神楽愛好者の集まりを指している。過去の主な愛好者は船大工や漁夫といった人たちだったが、今では大学生や社会人もいる。そして、「連中」になるためには、「鮫神楽を演じていること」と「大学生以上であること」の 2 つが条件となっている。最後に「伝承会」には、小学生から高校生までの人たちが所属しており、鮫神楽の伝承には欠かせない会である。伝承生や伝習生とも呼ばれることがあり、その名の通り、神楽を習い伝えることが役割としてあげられる。

ヒアリング調査では、連中で大学 2 年生の畑中大河氏と小西佑典氏、それから伝承生で高校 1 年生の川端真衣氏に話を聞いた。まず、畑中氏は鮫小学校 3 年生の時の「鮫神楽クラブ」をきっかけに鮫神楽をはじめた。そして、翌年には鮫神楽の演じ手を募集す

¹ 青森大学社会学部 木原研究室 2018 『八戸市鮫町の「鮫神楽」と地域振興に関する研究』平成 30 年度青森学術文化振興財団助成事業報告書

るチラシをみて門を叩いた。それから現在に至るまで鮫神楽を続け、今ではベテランの域に達している。

一方、小西氏は畑中氏と同じ鮫小学校に通っていたが、鮫神楽をはじめたのは小学6年生だった。また、小学生から高校生まで野球部に所属していたため、畑中氏のように鮫神楽だけではなかった。しかし、小西氏の曾祖父、祖父、父親は皆、鮫神楽を演じていたため、それがきっかけで鮫神楽を習うようになった。

畑中氏と小西氏は、調査当時から約8年前に一緒に舞をするようになった。今ではかれこれ10年ほどの仲になる。当然、お互いのことを知り尽くし、阿吽の呼吸で舞っているものと思っていたが、実際はまったく違っていた。それまで鮫神楽について語り合ったことはほとんどなく、調査時にはじめてお互いの神楽観を知ったような様子だった。さらに、お互いのことを信用していなかったとも語っていた。その理由についてははっきりと聞くことはできなかったが、「恥ずかしい」「かっこつけている」という気持ちがあったそうだ。

川端氏は、消極的な性格を変えたいという気持ちから鮫神楽をはじめた。パンフレットで鮫神楽の存在を知り、稽古場として使用されている鮫町生活館を訪問した。最初に習った演目は「三番叟」であり、その頃は毎週月曜日、木曜日、金曜日の3回の稽古が行われていた。しかし、当時は無知だったため3回の稽古では舞を習得することが難しかった。そこで、休日は自宅に帰ってひとりで練習をしたり、学校では昼休みに音楽室の個室でこっそり練習に励んでいた。その努力が実を結び、最初に習ってから3カ月ほどで三番叟を習得することができた。調査当時、今後はさらに新しい演目も踊れるようになりたいという意欲も出てきており、消極的な性格を変えることができたという。

このように、若い演者は学校のクラブ活動や地域の回覧板、パンフレットをきっかけに鮫神楽を知り、演者となっていることが明らかとなった。そして、鮫神楽を続けていくうちにそれぞれの想いが強くなり、ひとりの演者として確立されていく過程もわかった。それを具体的に話してくれたのが、畑中氏と小西氏である。

両者は師匠の言葉をしっかりと受け取っている。これを「真言」や「金言」と表現し

ていた。稽古が終わると、必ずお酒の場が用意され、そこで「真言」や「金言」が飛び出すようだ。例えば舞における「アジ」である。これは、舞の最中いかに「ちはや」が振れるかによって舞のかっこよさや出来栄が決まるのだが、こういった話が突然出てくる。また、「神楽の形は残しつつアレンジする分には構わない」「根と茎は絶対に変えないけど、どんな花を咲かせるかは自由」というようなことを言われたりする。これも、前触れがあるわけではなく、唐突に話が始まってしまう。したがって、いくらお酒の場であろうとも、畑中氏と小西氏は気が抜けないようだ。むしろ、稽古時よりも集中して話を聞いているのである。なぜなら、師匠達の唐突な「真言」や「金言」は、すぐ別の話題に変わってしまい、その場では二度と繰り返されることがないからだ。このようにして、若い連中はひとりの演者となっている。

もうひとつ、現在の鮫神楽の姿を記録するうえで重要なことは、公演機会が増えたことである。保存会会長が現在の柁谷氏になって以降、公演の機会は格段に増えた。2年前の調査では、「鮫神楽発表会」「鮫浜祭りパレード」「山伏神楽U-30」「史跡根城まつり」を訪問したが、それ以外にも公演の場があった。元々、神楽はその地域でのみ行われていたものであり、外へみせるものではなかった。その証拠として、鮫神楽は「鮫の神楽」とも呼ばれていた。これについて連中の方に聞いてみると、「鮫の」とは「鮫町の」「鮫町に住む私たちの」という意味だったそうだ。したがって、他とは接することのない鮫町の鮫神楽ということになる。しかし、現在では上記のように数々の公演の機会があり、その度に鮫町以外でも神楽を披露している。

ここで問題となるのが、仕事との関係である。イベントや催しに出演するということは、場合によっては仕事を休まなければならない。「鮫神楽が呼ばれることはありがたいが、その分、仕事も休まないといけないからね」と話す連中もいるように、公演の機会が増えることを一概に喜ぶことはできないのが現状である。その一方で、鮫町以外で鮫神楽を披露することにより、認知度が高まっていることは確かなことである。大きなイベントになるとニュースや新聞に取り上げられるため、後継者不足や伝承における課題について考える際には喜ばしいこととも言える。

このように、鮫神楽は昔の形を維持しつつも積極的に公演を行っている。そこには課題や苦勞はあるものの、現代を生きている神楽のひとつと言ってよい。

・対談からわかったこと

平成 30 年 9 月 2 日（日）、八戸市ポータルミュージアムはっちにて、「【対談】今を生きる神楽を語る ―鮫神楽と石見神楽―」を開催した。趣旨としては、少子化や高齢化といった社会問題があるなかで、鮫神楽と他地域の神楽はどのように生きているのか語り合い、そこから芸能が直面している問題や課題について考えることであった。語り手は、鮫神楽保存会会長の柁谷伸夫氏と島根県益田市の石見神楽保存会久城社中座長の神田惟佑氏である。

ここで話題となったことは、やはり後継者問題であった。鮫神楽の場合でいうと、高学年になって部活動や塾があると神楽から離れてしまったり、高校や大学への進学や就職を機に八戸から離れるとほとんど戻って来ないという現実がある。

一方、石見神楽の場合は、鮫神楽同様の面はあるものの、それに対処する取り組みを盛んに行っている。具体的には、1 ヶ月に 1 回か 2 回ほど、小学校のクラブ活動に行つて授業の一環で教えることを実践している。また、当時の久城社中のメンバーの多くは小学校の時に石見神楽を経験し、そのまま久城社中へ入っている。したがって、後継者育成という面では、教育現場へのアプローチが効果的だということがわかっている。また、石見神楽は「子ども神楽」の団体もあり、子ども神楽大会も開催されている。こうした一連の繋がりが後継者問題や担い手不足という課題を解決へと導く一手になると考えられる。

②平成 31 年度（2 年目）

ここからは、平成 31 年度の事業について、作成した報告書²の内容をもとに振り返る。

²青森大学社会学部 木原研究室 2019 『鮫神楽の伝承・発展と地域の振興に関する研究事業』平成 30 年度青森学術文化振興財団助成事業報告書

この年は、「若者の力」をテーマに掲げて事業を進めた。そして、前年度の事業でも触れた、芸能を活用した地域の進行に一定の成果をあげている、島根県益田市の実地調査を行った。調査期間は、令和元年10月11日（金）から13日（月）である。この調査には柗谷氏にも協力を依頼し、2名で実施した。この実地調査の目的は、平成31年度の事業名である「鮫神楽の伝承・発展と地域の振興に関する」ことを考えるにあたり、鮫町や鮫神楽に焦点を絞るだけでは具体案が出ないと思い、他地域の成功例を鮫神楽に応用することだった。実際、前年度には久城社中の神田氏の語りを聞いているためより具体性が増すとともに、柗谷氏に石見神楽の現場をみていただくことで鮫神楽の伝承や鮫町の振興に関する具体策が浮かび上がるのではないかと思った。

また、青森大学を会場として、教員や学生も含めたワークショップを開催し、鮫神楽の現在と今後の発展、そして地域の振興について考えた。さらに、鮫神楽連中の畑中氏へのインタビュー調査も実施した。

・石見神楽の実地調査

調査初日、実地調査でお世話になる方々と島根県西部県民センター商工観光部の方との座談会を開催した。そこでは、石見神楽の出演料の話題となった。石見神楽はお金にとれる神楽であり、相場は500円となっている。しかし、1500円に値上げする価値はあるといい、それでも集客は見込めるとのことだった。しかし、一方では入場料を値上げした場合、それに見合う舞を提供できるかと言えば必ずしもそうではないと言う関係者の話もあった。それだけ、現地の観客の目は肥えており、市場の原理を考えなければならぬほどのレベルだった。「恥ずかしくない舞を披露しなければならない」という意気込みもあるようで、ひとりの観客が1500円を支払う価値のある舞が求められている。

これに似たようなことは鮫神楽でも起こっている。石見神楽ほどではないにしろ、畑中氏や小西氏が舞のクオリティを意識するようになったのは、連中の師匠たちの目が厳しく、また鮫町以外で披露する機会が多くなったことを受けてのことだろう。このよう

に、神楽の芸風は違えど観客を前にして神楽を演じるということは、単に伝統を守るとか神楽を奉納するといったこととは別の領域で今を生きているということが示唆された。

調査2日目は、中島町にある中島公民館で開催された秋祭りでの神楽を見学した。まず、公民館に隣接する神楽殿で神楽が奉納され、その後で公民館内で神楽が演じられた。出演は石見神楽久々茂保存会であった。上演時間は20時から24時まで行われた。榎谷氏と館内へ入ると、既に来館していた観客たちが一斉に我々を見た。その目は明らかに知らない人を見る目だった。それほど、地域の人たちが集まる場であり、皆が顔見知りということだろう。観客は家族連れが多く、年配の方から小学生まで50名ほどだった。また、神楽が上演されている時には、館内で無料のドリンクが振舞われ、綿菓子を作るコーナーも設けられていた。関係者に話を聞いてみると、この秋祭りは、中島自治会、子ども会、「イチョウの会」が企画したもので、ドリンクや綿菓子も各会がお金を出し合って提供しているものだった。そうすることで、子ども達が楽しみながら神楽を観ることができるし、子どもがいれば親も神楽を観ることになる。このような仕組みもあって、長時間神楽を観るということを可能にしているようだった。

調査3日目は、まず益田市内にある島根県芸術文化センター「グラントワ」の見学をおこなった。榎谷氏も八戸市公会堂の館長ということで、グラントワの館長との話は盛り上がっていた。その後、益田市板井川にある板井川自治会館で開催された祭りを見学した。ここでも石見神楽が上演された。また、そこでは地域の人たちで構成されている「やるき人間の会」の皆さんが神輿を担いで回っていた。石見神楽の現場では、ここでも多くの地域の方々が参加し、皆で祭りを運営している様子が見てとれた。

夜になると、益田市遠田町の海竜山遠田八幡宮で開催された例大祭を見学した。ここでは、久城社中が神楽を披露していた。特筆すべき事項としては、神楽が上演されている最中、5人ほどの小学生が自前の神楽の小道具を持ち、ステージにもたれながら神楽を見ている光景だった。また、その中には目の前の神楽に合わせて舞っている子どももいた。それほど地域に根付いた神楽であると同時に、子ども達が早い時期から神楽とと

もに生活している環境が次の担い手となっていくのだろうと感じさせられた。

・ワークショップ

このワークショップでは、鮫神楽保存会会長の柁谷氏を招聘し、青森大学で実施した。目的は、鮫神楽の現在と今後の発展、そして地域の振興について考えることである。参加者は、本学教員2名と学生である。

まず、ここで話題となったのはやはり後継者問題である。実地調査の結果から、石見神楽はカッコいい存在であり憧れの気持ちがあるため、子ども達の参加意欲を高めている。一方の鮫神楽は、昔ながらの神楽を継承し奉納に重きを置いていることから、石見神楽のようにはない。それぞれの神楽に良さはあるものの、後継者問題を考えるにあたっては、担い手を確保できなければどうにもならない。そこで出された意見として、生活における選択肢としての鮫神楽とスポーツを対比して、そこに意味づけをしてみてもどうかというものだった。そして、鮫神楽という芸能を選択することによるメリットを明確な形で示すことができれば、自然と人は集まってくるのではないかという意見も出された。

次に話題となったのは、鮫神楽を伝承するにあたって重要なことは、20代・30代の中堅層の人数を増やすということだった。これを実現するために提示されたことは、「当該地域の人口の1%にあたる人数が他地域から移り住んでくれることが重要である」というもので、それに成功しているのが島根県だった。他地域から移り住むきっかけとして考えられることは、進学、就職、結婚といったことであろう。そう考えると、これらに該当するのは20代や30代であり、鮫神楽の伝承に当てはまる。したがって、伝承問題や地域の振興については、それら単体だけに目を向けるのではなく、取り巻く環境や別の視点を用いることが重要であると言える。さらには、芸能や地域振興という枠を超え、移住政策といった大きなテーマも取り扱わなければならないのかもしれない。

・畑中氏の取り組み

畑中氏は、新たな取り組みを考えていた。それは、神楽に対して熱い気持ちをもった若者が集まり、八戸市の神楽を盛り上げる、というものだった。それは、芸歴が長い、いわゆる師匠や先輩といったタテの関係だけではなく、同世代というヨコの繋がりを強化することが狙いだった。そのために、「若者が語る機会」を設け、神楽を演じるようになったきっかけや、神楽に対する想いなどを語ることにより、熱い気持ちを共有できる。そうすることで、タテとヨコの関係がより一層強くなり、八戸市の神楽がさらに盛り上がると思っている。現時点では仮称であるが、「八戸地域における若年層の神楽伝承者の会」と考えている。また、具体的な目的と活動内容についても語っていた。

II 鮫神楽と地域の繋がり

今年度の事業は、「地域コミュニティの再考」をテーマとした。過去 2 年間の事業では、鮫神楽の現在の姿を記録し、他地域における神楽と地域振興を調べながら鮫神楽や鮫町のことを考えてきた。したがって、今年度は実際に鮫神楽と地域の繋がりについて調べ、本事業の名称である「鮫神楽の伝承・発展と地域の振興に関する研究」を遂行した。

主に実施した調査は以下の通りである。

No	日時	調査場所	内容
1	令和 2 年 8 月 14 日 (金)	八戸市鮫町	墓獅子の見学・帯同
2	令和 2 年 8 月 15 日 (土)		
3	令和 2 年 10 月 2 日 (金)	八戸市鮫町	虎舞稽古
4	令和 2 年 10 月 3 日 (土)	八戸市内	史跡根城祭り調査

(表 1) 現地調査

No	日時	調査場所	内容
1	令和 3 年 2 月 11 日 (木)	八戸市鮫町	稽古の見学・ヒアリング
2	令和 3 年 2 月 12 日 (金)		

(表 2) ヒアリング調査

・墓獅子

8 月 14 日 (金) と 15 日 (土) に墓獅子の見学と帯同をした。まず、両日とも正午に鮫町生活館に集合して、着付けや道具の準備をした。その後、保存会と連中の方々は車で墓地まで移動し、私は畑中氏と徒歩で向かった。当日は小雨模様だったが、決行することとなった。

墓地に到着後、待機場へと向かった。そこは墓地の中心に位置しており、依頼を受けるとすぐに待機場から墓地内にある依頼主の墓へ行き、墓獅子を舞うという流れになっている。一日目は小雨ということもあり、依頼は2件ほどだった。



(写真①: 墓獅子)

(写真②: 獅子)

【写真は木原が現地にて撮影したもの】

調査二日目は、天候も良く気温は30度近くあったと思う。この日は前日と比べて依頼が多かった。1件目が終わって待機場に帰ると、それから15分後には次の依頼があった。2名の家族も入れば、10名ほどが集まって墓に手を合わせる家族もいた。これは、明らかにお盆の帰省だった。

調査が終了し、鮫町生活館へ帰って片づけをした後、連中の方へ話を聞いた。その内容は、過去に一日で20件ほど墓獅子の依頼を受けたことがあるそうで、事前に依頼の予約を受け付けて墓獅子を舞うスケジュールを決めていた時代もあったそうだ。その時は、1件終わったら待機場に戻ることなく次の墓へ向かっていたようで、その流れを8月のお盆の暑い日に20件も回るのは体力が続かなかったと話していた。

しかし、最近は依頼の数が減っているという。その理由は様々あるようだが、その中でも曾祖父や祖父が亡くなってしまうと、後を継ぐ者が墓獅子の依頼を辞めてしまうと

ということが多いという。確かに2日間の調査を振り返ってみると、年配の方からの依頼がほとんどだった。なかには、10名ほどの家族もあったが、これはお盆に帰省してきた家族も含まれていた。連中の話によると、依頼をする人は毎年同じであり、10年以上も続けて依頼をしているという。そのため、その方々は墓獅子が舞われる時間帯も把握しており、鮫神楽が墓地に到着するとすぐにその場で依頼を出すことも少なくないようだ。さらに、鮫神楽が墓地へ到着する前から墓地へ行き、待っている人たちもいるようである。

長年依頼をしている人たちのなかには、墓獅子の掛歌を全て暗記し、鮫神楽連中に合わせて歌うことができる人もいるようだ。調査時、榎谷氏が鮫神楽の歴史や演目、そして墓獅子の掛歌が記載されている資料（資料編にあり）を配布していたが、それすらも受け取る必要がないほど覚えているのだ。

・史跡根城祭り

調査の1ヶ月ほど前、榎谷氏から私宛に「10月3日に開催される史跡根城祭りで虎舞をやるから出演してくれないか」という依頼の電話がかかってきた。その電話では「虎を2頭出すからそのうちの1頭に入ってほしいので、青森大学の学生もひとり連れてきてください。出るだけで良いからお願いします」とも言われた。「出るだけ」とはどういう意味なのかわからなかったが、その時は演目のなかで主となる虎ではなく、その傍らで何かをする虎だと理解した。それにしても無茶なお願いだったが、3年間もお世話になっている榎谷氏からの依頼を断るわけにもいかず、その場で承諾した。しかし、あらためて考えてみると、私は鮫神楽を一度も演じたことがなく、しかも学生と一緒に出演するとなるとそれなりの準備が必要だった。

その後、私のゼミの学生へ声をかけてみたが、誰一人として引き受けてもらえなかった。それも当然のことかもしれないが、榎谷氏との約束を破るわけにはいかなかったので、現在八戸市に住んでいる本学の卒業生へ依頼をすることにした。すると、思いがけないことに本人から了承の返事をもらうことができた。

こうして、とりあえず出演すること自体は可能となったが、最も難関なのは演技を習得することだった。先述の通り、私は1度も演じたことがなく、さらに卒業生と一緒に出演するとなるとこれは無理難題であった。しかし、どうにかして乗り越えなければならぬため、まずは9月30日に私ひとりで鮫神楽の稽古に出向いた。

午後7時過ぎ、連中の方々が全員揃い、稽古が始まった。すると、連中のひとりが奥の部屋から虎の衣装を持ち出して私の目の前で広げ「これに入って」と言った。まず連中の方が前側（頭と前足の部分）に入り、私は後側（後足と尻尾の部分）へと入った。そして、「前の人（前側の連中）についていけばいいから」とだけ言われ、虎舞の稽古が始まった。私は連中の指示通りにひたすら前の人について行こうとしたが、如何せん演目全体の流れもわからず次の動作が何かも知らないため、ただやらされている状態だった。

そして、10分ほどで演技が終了し、私は出来栄に対する評価を求めた。すると、「本番は先生には前側に入ってもらってから、さっきみたいにやってください」と言われた。スポーツの現場もそうだが「教える／教わる」関係性のなかで技術を習得する場合、少なからずその過程を説明する時間はあるものだ。しかし、今回それはまったく無かった。素人の私に何の説明もなく「とりあえず経験してみる」ことから始まり、次はいきなり応用編へと移ってしまう。本当に無茶なやり方だと思ってしまったが、鮫神楽ではそうやって演技を習得していくようだ。

2時間ほどの稽古が終了後、懇親会の場で本番の流れについて聞いてみた。すると、実は本番に出演する虎の数は1頭であり、それを演じるのが私たちだということがわかった。そして、史跡根城祭りに出演する団体は鮫神楽だけではなく、さらに例年100名を超える観客が集まるという。榎谷氏から言われた「出るだけでよい」ことには到底ならない。いくら私が素人だろうとも、鮫神楽の名前を背負って出演するわけであり、集まった観客は鮫神楽として虎舞を観るだろう。したがって、私が素人だからといって容赦されるわけもなく、連中としての役割を果たさなければならない状況に追い込まれた。



(写真③：虎舞の衣装)

【写真は現地にて卒業生に撮影してもらったもの】

10月2日、本学卒業生とともに、稽古へ参加した。この時も、卒業生に対する連中の指導は、「先生の後をついて行けばいい」というものだけだった。卒業生はひどく困惑した表情を浮かべていたが、私はその気持ちが痛いほど理解できたので、演目と動作の一連の流れを本人に説明した。しかし、前回とは違って私は前側を担当しなければならなかったため、私が失敗すると後側を担当する卒業生も間違った動作となり責任は重大だった。そして連中の方々が見守る中、稽古が開始された。

稽古の最中、一カ所だけ動作が合わない部分があった。それは、大人と子どもたちと向かい合って首を振る動作のとき、前回の稽古は4回だったが、今回は3回になっていた。これについて後ほどの打ち合わせでは、首を振る回数はその時々で違うということがわかり、今回は3回にすると言われた。それを含め、2回目の稽古を始めた。本番を翌日に控えていたこともあり、私と卒業生の緊張感が高まっていた。

その日は、桎谷氏の紹介で無料で宿泊できる民家に泊まることになった。稽古が終わって宿泊所に移動したのだが、私たちは稽古時に撮影した動画を観ながら、動作の詳細や合図を出すタイミングを確認し続けた。気がつけば深夜2時だった。

10月3日、本番当日を迎えた。実はその日は青森大学の大学祭が開催されることになっていた。そのため、zoomを使用して本事業の趣旨や実施内容、そして鮫神楽の様子を大学祭の社会学部ブースへ生中継することにした。まず、鮫駅の目の前から中継をスタートさせ、鮫神楽の拠点である鮫町生活館へと移動した。その後、本番前の最終稽古の様子を映しながら、午前の中継を終えた。

そして、午後1時半に史跡根城へと移動した。ここでも、会場の様子などを中継し、青森大学と大学祭へ来ている地域の方々へ本事業の様子を届けた。その後、卒業生と最終の打ち合わせをして、午後2時半の本番を迎えた。その様子は、鮫神楽の連中のひとりをお願いをして青森大学へ中継をしてもらった。

本番中は極度の緊張をしていたため、演技の詳細についての記憶はほとんどないが、卒業生との打ち合わせ通りに演技をすることができ、大きな失敗することなく演技を終えることができたことは確かな記憶として残っている。終了後、卒業生と握手をして成功を喜んだ。また、柗谷氏からも演技の内容に関して褒めていただいたことは非常に嬉しかった。

本番を終えて会場から鮫町生活館へと戻り、片付けなどを行った後に懇親会へ出席した。そこで、卒業生とともに連中の方々へ演技の出来栄えについて伺ってみた。すると、以下のような評価だった。

- 虎舞の虎にしては強そうに見えなかった
- 舞手は虎に近づこうと寄っているのに、先生は子どもたちの方向へ進んでいた
- 練習通りにはできていたけど、観客と接する場面がなかった。遊びというか楽しむ気持ちがなかった
- もっと客席に行って日向ぼっこする仕草とか、草原にいる虎のような仕草がなかった

このように、連中からの評価は散々なものだった。しかも、2時間ほどの懇親会において、私たちが演じた虎舞についての話を自ら切り出す連中はいなかった。正直、かな

り落ち込んでしまったが、冷静になって考えてみると、鮫神楽の連中からすると鮫神楽を演じるからには例え当人が神楽未経験者だったとしても、鮫神楽の一員として評価することは当然のことだろうと感じた。また、観客側の立場で考えてみても、私たちが素人であるかどうか、または今回だけの参加であるということは、観客にとっては関係ないことだろう。したがって、私たちの演技に対する連中の評価は真摯に受け止めなければならぬ。

・鮫小学校の「神楽クラブ」

まず、調査の対象として選んだのは、八戸市立鮫小学校である。なぜ鮫小学校かという点、鮫神楽の連中で現在大学生 4 年生の畑中大河氏と小西佑典氏が卒業した学校であり、なおかつ過去に神楽クラブがあったという情報を入手していたからである。そして、畑中氏には鮫小学校の竹花剛二先生（以下、竹花氏）を紹介していただき、2 月 12 日（金）にヒアリング調査を実施することとなった。畑中氏と竹花氏の関係は、畑中氏が鮫小学校に在籍している時に竹花氏も鮫小学校に勤めていたようであり、現在、鮫小学校に勤務している教員のなかで畑中氏が知っている唯一の先生が竹花氏だという。

竹花氏は、平成 18 年度から平成 24 年度まで鮫小学校に勤務しており、それから一旦は別の学校へ移った。その後、平成 29 年度から現在まで教頭先生として鮫小学校に勤務している。

調査当日、午前 10 時に鮫小学校へ到着し、職員室へと案内された。そこで竹花氏への聞き取りを実施した。以下では、竹花氏から聞き取った内容をもとに、鮫神楽と鮫小学校との繋がりについて記す。聞き取りの内容を文字起こししたものは、資料編に載せることにする。

まず、竹花氏からいただいた資料のなかに、過去の「神楽クラブ」に所属していた人数が書かれたものがあった。以下、いただいた資料をもとにして、一覧にまとめたものを載せておく。

No	年度	人数	備考
1	平成16年度	5人	
2	平成17年度	4人	
3	平成18年度	0人	
4	平成19年度	?人	
5	平成20年度	2人 + α	6年：2人
6	平成21年度	0人	
7	平成22年度	0人	
8	平成23年度	0人	
9	平成24年度	16人	6年：2人、5年：2人、4年：12人
10	平成25年度	14人	6年：1人、5年：6人、4年：7人
11	平成26年度	17人	6年：4人、5年：7人、4年：6人
12	平成27年度	10人	6年：1人、5年：3人、4年：6人
13	平成28年度	12人	6年：2人、5年：4人、4年：6人
14	平成29年度	9人	6年：2人、5年：4人、4年：3人
15	平成30年度	0人	石戸昭治氏からの申し出により神楽クラブ廃部

(表3) 八戸市立鯨小学校 神楽クラブ

※竹花氏からいただいた資料をもとに木原が加筆・作成

「クラブ」とは、放課後に行われる部活動やクラブ活動のことではなく、「クラブ活動」という授業として開講されていたものである。1990年代は年間35時間の授業として組み込まれており、国語や算数と同じ位置づけで行われていたという。その後は、正式な授業からは外れたようだが、当時から毎週木曜日の6時間目にこのクラブ活動が実施されていたようだ。なお、クラブ活動の種類は神楽だけではなく、他にも様々あるようだった。

神楽クラブが設立されたのは、平成16年度である。その経緯について、竹花氏から当時の校長先生へ連絡を取っていただいたのだが、繋がらなかったため詳細は不明である。しかし、竹花氏は「おそらくなんですけど石戸さんがよくお話していたのが、やっぱ

り神楽をこれから伝承していくためには、やっぱり小学生の子ども達に入ってもらうことが一番だということで、そういう風な話もたぶん学校に何度か足を運んでされたんじゃないかなと。」と話していた。

鮫小学校では、4年生からクラブ活動に所属することができるようだ。そして、所属先を決めるにあたっては、まず、児童が第一希望から第三希望まで指定の用紙に記入して提出する。次に、教員が全児童の希望を集約して、最終的な割り振りは教員が決めるという流れになっている。畑中氏は4年生になる以前から鮫神楽を習っており、鮫町生活館での稽古に参加していたのだが、クラブ活動の所属先を決めるとき、第三希望に神楽クラブを選択したようだ。本人は「申し訳程度に書いた」と話していたが、先生方も畑中氏が鮫神楽を習っていることを知っていたため、「書かないの？」と言われそうだったからとりあえず書いたそうだ。

神楽クラブを第一希望に選ぶ児童は少なかった。だいたい第二希望や第三希望に神楽クラブを選んでいったという。また、4年生から神楽クラブに所属したとしても、卒業するまで辞めずに続ける児童は少なかったという。その原因は主に2つだった。まず1つ目は、5年生から委員会が始まり、学校生活が忙しくなることである。次に2つ目は、神楽クラブでの連中による指導が厳しいことだった。神楽クラブに所属する前から鮫神楽を習っていた畑中氏でも厳しいと話しているほどだったので、相当な厳しさだったと推測される。また、当時神楽クラブに所属していた児童は頻繁に「厳しい」という感想を漏らしていたそうなので、竹花氏も神楽クラブの厳しさを感じ取っていたようだ。

さらに、鮫神楽の方々は神楽クラブで教えるにあたり、もうひとつの壁があった。それは方言である。竹花氏は「こちらの方言っていうのはまたね、なかなか特殊だったり...」と話しているし、畑中氏も「家違うだけでも方言が違うレベル」だと言っている。さらに、鮫神楽における神楽の稽古で用いられる言葉もそうとう難しいという。畑中氏は普段から生活館での稽古に参加しているから師匠たちの言葉を理解することができるそうだが、週1回の稽古を受ける小学生にとっては難解のようだ。しかし、鮫神楽の師匠たちが神楽クラブで教えるとき、多少の配慮はあったようだ。配慮という表現が適

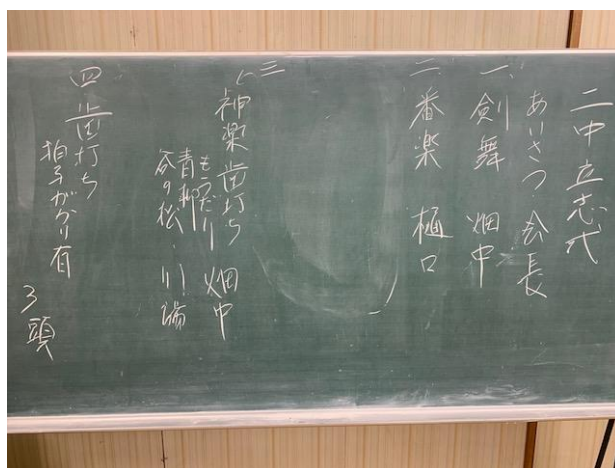
切ではないかもしれないが、例えば普段の稽古では使用しない「イチ、ニ、サン」といった表現を用いたりしていたと畑中氏は話す。

(表 3) をみると、平成 24 年度から突然、人数が増えていることがわかる。これについては、神楽は男性だけということだったが、この年から女子児童も参加できるようになったことが人数が増えて理由である。そして、その後の 5 年間は常に 10 名ほどの人数が所属していることもわかる。

しかし、残念ながら神楽クラブは平成 30 年度に廃部となってしまった。その経緯は、当時、指導していた石戸昭治氏が自身の年齢を考えたくえで引退させてほしいと申し出たそうだ。これについて畑中氏は、「(平成) 30 年は、(石戸氏が) 仕事で脚立か何かから落ちて腰やった」と振り返り、竹花氏もそのように記憶していた。今後、神楽クラブを復活させるかどうかについては、当然ながら指導者がいないと厳しいようだ。畑中氏はその立役者になり得る存在だと思われるが、4 月から八戸市内で働くため、現時点では厳しいという。ただ、復活させたい気持ちはあるようだ。

・八戸市立第二中学校「立志式」

鯨小学校でのヒアリング調査を終えた後、八戸市立第二中学校（以下、中学校）へと向かった。ここでは「立志式」が行われ、鯨神楽が出演の依頼を受けた。



(写真④：立志式での演目)

【写真は現地にて木原が撮影したもの】

インタビューをした佐々木原典子先生（以下、佐々木原氏）によると、この立志式は昔の14歳の元服にならった行事であり、子ども達に14歳のケジメをどう捉えるかということ話をしながら、「志を立てる」ということで、目標を持って生活していこうというような良いきっかけにしてほしいというものである。また、これは八戸市内のどの学校でも行っていると思うとも話していた。

中学校で鮫神楽に依頼を出したのは初めてだという。例年は、講演会や活躍している人を呼んでいたようだが、今年は佐々木原氏が八戸の伝統芸能が大好きということと、他の教員で実際にえんぶりをやっている方がいるため、八戸の魅力をもっと伝えていきたいという想いもあり、今回は鮫神楽に依頼したという。さらに生徒にとって普段はみることのできないものをみられるチャンスはあったほうが良いとも話しており、現在は様々な行事が削られたり縮小されているため、基本的には八戸の良さを知らせたいという気持ちもあったようだ。

今回の演目は、「剣舞（畑中氏）」、「番楽（樋口氏）」、「歯打ち（畑中氏、川端氏）」と全生徒の頭を噛む歯打ち（畑中氏、川端氏、樋口氏）である。畑中氏に話を聞くと、前日の稽古よりも太鼓や笛のテンポが速かったので、自分好みだったと言っていた。テンポが速くなった理由を確認することはできなかったが、私の推測では、稽古と本番では気持ちの入り方が異なり、しかも今回は中学2年生と保護者を目の前にしていたため、連中の方々は熱を帯びていたのではないかと思っている。これについては、梶谷氏も同じようなことを話していた。

Ⅲ 総括

ここからは、3年間の総括として、鮫神楽の伝承・発展、それから地域の振興についてまとめたい。

まず、鮫神楽の伝承・発展については、現在、伝承生はいるものの、次世代の担い手を育成するという面に課題がある。また、20代から30代の中堅を担う人材がいないということもわかった。そこで、本事業において考えられた対策を以下に挙げる。

1. 伝承生（小学生から高校生）を更に充実させるためには、生活における選択肢としての鮫神楽とスポーツを対比し、そこに意味づけをする。また、メリットを打ち出して広く周知する。
2. 中堅を担う人材については、当該地域の人口の1%にあたる人数が他地域から移り住んでもらえるような仕組みをつくる。進学、就職に目を向けることが重要である。
3. 石見神楽のように教育現場へのアプローチの強化、ならびに鮫小学校の神楽クラブといった取り組みを積極的に行う。

上記3つを達成するための具体案までは見出すことができなかったが、今後、鮫神楽を途絶えさせることなく伝承し、なおかつ発展させるためには、まずはこれらに組み込む必要がある。

次に、地域の振興については、鮫神楽を単体として見るだけでは、芸能による地域の振興は叶わない。したがって、上記の「2.」「3.」のような神楽と結びついている小学校、中学校、高校という教育現場、そして移住政策に目を向ける必要がある。そして、鮫神楽が生活における1つの選択肢となることで、学業、就職（仕事）、私生活、そして神楽が循環する仕組みが出来上がると思われる。そうすることによって、鮫町に留まる、または他地域から移住する人も増えれば、地域の振興が可能となるのではないだろうか。

【資料編】

【竹花先生へのインタビュー文字起こし】

竹花：学校に残っているいろんな資料をですね、ちょっと調べてみたんですよ。そしてですね、本校に神楽クラブができたのが平成 16 年度。ちょっと学年の人数までは確認できなかったんですが、16 年度はどうやら 5 人、17 年度 4 人で活動していることがわかりました。18 年度はですね、この年はちょっとクラブを希望する児童は 0 人だったので活動はしていないようでしたが、19 年度は 6 年生以外の子で、たぶん部員が出て、19 年度、20 年度活動して、21 年度から 23 年度まではちょっとお休みしたんですが、平成 24 年度ってたぶん畑中君が 6 年生の時かな。

畑中：そうですね。

竹花：この時に、たぶんこの 6 年 2 人っていうのは、畑中君と

畑中：加藤シュンスケ？

竹花：加藤シュンスケくんかな？うん、この時 4 年生がですね、割と。神楽っていうのは男性だけっていうことで行われていたんですが、この時ちょうどですね、やっぱり子どもたちも少なくなってきた、まー、そこの女性も解禁ということで進めて。だからこの時女性の方というか女の子が入って、活動し始めた。この 24 年度からしばらくの間はですね、結構 10 人以上いて、で、30 年度になったときに神楽を教えていただいていた石戸さんという方が、ちょうどね、年齢も年齢なのでということで、ここで引退させて下さいということで、それで廃部ということになったような経緯があるようです。

木原：ありがとうございます。

竹花：ちょうどですね、16 年度っていうのが、あ、平成 17 年度っていうのが本校の 130 周年の年で、その前の年にそれができたということで、平成 16 年度のこのいろんな中に一応鮫神楽クラブの発表会が行われましたということで 12 月 1 日にですね。だから、まずこの年からできて、その年から発表会などを開いている

んだなど。もしよかったらこれ。

木原：あ、ありがとうございます。あの、鮫神楽クラブが始まった経緯みたいなものは、

どういった形で始まったのでしょうか？

竹花：そこがですね、当時の校長がサカモト校長だったんですが、ちょっと私電話入れてみたんですけど繋がらなくてですね。その辺の経緯は私にもわからないんですけども。おそらくですね、おそらくなんですけど石戸さんがよくお話していたのが、やっぱり神楽をこれから伝承していくためには、やっぱり小学生の子ども達に入ってもらおうことが一番だということで、そういう風な話もたぶん学校に何度か足を運んでされたんじゃないかなと。その時に学校にはクラブ活動というものがあるので、そこでもし教えてもらえるのであればという風な話になったんじゃないかなという気がしますね。

木原：そうなんです。じゃあ当初から5人はクラブ生がいらっしやったということですね。

竹花：そうですね。

木原：畑中君は入ったんだよね？

畑中：あの、クラブ活動って自分で決められなかったんですよ、今はどうかかわからないんですけど。第一希望から第三希望まであって、先生がたぶん調整していたんですよ。

竹花：そうそうそう。

畑中：結局、申し訳程度に第三希望にマルをつけたみたいな（笑）

竹花：畑中君はクラブとは関係なくやってたんだもんね。

畑中：そうですね、その前からやってたので、師匠からも「入るでしょ」みたいな感じで。

木原：あの、私、島根県出身なんですけど、それで4月で青森9年目になるんですけど、島根にも石見神楽という神楽がありまして、やってはないんですけど、神楽とずっと一緒に隣で観ながら過ごしてきて、それで今回、2年前に鮫神楽っていうの

をインターネットでみて、あの、三社大祭から入って、それで鮫神楽は子どもたちがすごい活動している姿とかあって、石見神楽も同じような子どもたちにすごく力を入れて、結構活発にしている神楽なんですけど、それで同じ雰囲気を感じたというか。それで、神楽クラブの話を知ったので、なんかこう人数が少ないなかでも鮫神楽を途切れさせないような活動があるんだなと思って。すごく魅力的というか、そこでまた畑中君に話を聞いたら、ここの出身で。じゃあ13年くらい続いたんですね。

竹花：そうですね。

木原：先生はこれ（神楽クラブ）に関わったりしていたんですか？

竹花：いや、こちらのクラブの担当にはなったことがないので、その辺は詳しくはわからないんですが、はい。

木原：じゃあこれは鮫神楽の方々が鮫小学校に来て、教えていたんですか？

竹花：そうですね。もしよろしければ写真もですね、何枚か昔のやつがあるので。

木原：あの、児童数も多いですね。そっちにもびっくりしています。

竹花：あー、でもそんなでもないですよ。300ちょいくらいかな。

木原：私の地元では、私が小学生の時、全校生徒が20人くらいでした。

竹花：あー、そっかそっかそっか。

木原：複式学級だったんですよ。中学校も全校生徒100人だったので。

竹花：たぶん大河君がいたあたりは、500人弱くらいはいましたね。今はその半分になっていて、270くらい。

木原：いやーそれでも多いですね。僕、高校でも400人くらいしかいなかったの、ほんとに田舎の田舎だったので、小学校で三桁になるのは全然考えられないです（笑）。でも、その他にもクラブはあったんですか？

竹花：そうですね、神楽クラブ以外にもいろんなクラブがありましたね。

木原：それで、（畑中君は）第三希望に選んだ？

畑中：マンガクラブで絵を描くやつがあって、体育クラブって竹花先生が...

竹花：そうだねー、体育のクラブ

畑中：申し訳程度にこうやって（笑）

木原：とりあえず書いておこうみたいな感じで。

畑中：書かないと自分のなかで...先生も知ってたから「書かないの？」みたいに

竹花：うんうんうん（笑）

木原：その時、そのクラブに入って今までやってたじゃないですか。それで、師匠さんたちが学校に来て教わるのって違いましたか？生活館でやるとの、クラブでやるのって、気持ちは違いました？

畑中：なんか、昔の言葉でリズムをとって、なんかよくわからない言葉でやるんですけど、こっち（クラブ）はまったく通じないから、イチ・ニイ・サンとかすっごい今の教え方に師匠たちが直したりしてて。僕、始めた頃2年目？小3から始めて4年生でクラブ入って、2年目だから教えろみたいに言われたりして。

木原：やっぱり言葉って通じないんですか？

畑中：通じなかったですね。僕は常にそこにいたからわかるけど、初めて学校でやるっていう子は全然たぶんわからなかったから。あの、放送室に太鼓置いてあったんですよ。そこに。確か一階の

竹花：低学年学習室ってとこ

畑中：そうですね、そこでなんか普通に空き教室でやってて

木原：いわゆる方言っていうことだと思うんですけど、僕、昨日もお邪魔してたんですが、全くわからないんですけど、小学生ってわからないってことがあるんですか？

竹花：そうですね、やっぱりこの地区の子たちは意外とお爺さんお婆さんと同居している子もいるので、あれなんですけれど、でもそれでもやっぱりこちらの方言っていうのはまたね、なかなか特殊だったり...（笑）

木原：はい（笑）

畑中：家違うだけでも方言が違うレベルだから。

木原：竹花先生はずっと鮫の方なんですか？

竹花：そうですね、私は生まれもそうですね。実家もあります。

木原：そうですね、じゃあもう 70 代 80 代の方が喋ってても全部わかります？

竹花：全部ではないですけどねー。うん。

木原：そうですね。でもほんとに昨日もお邪魔してて、私は遠くから見てたんですけど、神楽の方同士が喋っているのはほとんどわからないです。

竹花：(笑)

木原：それで、小学生がいるところにもお邪魔してるんですけど、その時は若干丁寧に伝えているようではあるんですけど、それでもポカンとしている小学生がいたりとかすると、教えるのもただ神楽を教えるだけじゃなくて、言葉の問題とかもあるのかなと思ってみました。

竹花：そうですねー (笑)

畑中：小西が完全に理解してる。お父さんの訛りが凄いから (笑)。小西が凄いわかってる感じかな。

竹花：うんうん。小西君とも面識があるんですか？

木原：はい、この助成事業の一番最初にお話を聞かせていただいたのが、畑中さんと小西さんだったので。その時に初めて、ずっと神楽をされてきているので阿吽の呼吸と聞いていましたから、お互いのことをすべて知っているのかなと思って話を聞いたら、実はあまり話をしてなかったみたいで、ほんとに録音しているときに「そういうこと思ってたんだね」とか「はじめて知った」とかそういうレベルだったので、そこにもちょっとビックリ。

竹花：(笑)

木原：過去 2 年の報告書があるので、今年度分ができれば 3 冊まとめて先生の方へお送りさせていただきます。

竹花：あー。

木原：ほんとに、はじめて語ったことがあるみたいなので。それでたぶん二度と話さな

いって (笑)

竹花 : (笑)

木原 : たぶんその報告書は (畑中氏へ) 渡していると思うんですけど。

畑中 : はい。

木原 : ちょっとしたものなんですけど。保存していただければ。

竹花 : はい。

木原 : 先生、長いですよ？

竹花 : でも一回、別な学校に行っているんで、私は平成 18 年から 24 年まで最初に来て、また 29 年度から教頭ということで来てる。

木原 : うわー！その当時も野球部

竹花 : その当時は野球部。今はこちらの学校、まあ市内全部なんですけど部活ではなくなって、スポーツクラブで全部地域のほうでやってる。

木原 : 神楽クラブ復活っていうのは無さそうですか？

竹花 : いやー、それこそ指導してくださる方が大河君とかの世代でやるっていうのであれば、もしかしたらね。

木原 : やりますか？

畑中 : 気持ちはすっごくやりたいんですよ。むしろどうぞって感じで。でも来年からがちょっと絶対厳しいので。今の時期ならいいんですけど、看護師ってなるとちょっと。

木原 : じゃあ廃部になって 3 年くらいですよ。

竹花 : そうですね。

畑中 : (平成) 30 年、たぶん仕事中に脚立か何かから落ちて腰やった年なんですよねたぶん。

竹花 : あー。

畑中 : 腰の骨折ただか何だか

竹花 : そうだそうだ。なんか怪我したって言ってたね。

木原：あの、これも以外でした。石戸さんの方から申し出があって廃部になったのが意外で。僕のイメージだと小学校の部員がいなくなったとか、小学校からの申し出だと思ったんですけど。違うんですね。

竹花：うんうん。

木原：(廃部の) 前年度まで 9 人いたんですよ。4 年生と 5 年生があがれば 7 人ということですよ。

竹花：そうですね。意外とでも 4 年生の時は興味持って入るんだけど、でも次の年で抜ける子も結構ね。3 年続けるっていうのはなかなか珍しいんじゃないかな。

木原：だんだん少なくなってますもんね。

竹花：うん。

畑中：まー、こっち (鮫神楽) と同じですね。

木原：(笑)。4 年生からクラブに入ることができる？

竹花：うん。

畑中：4 年生からなんか鮫小は忙しくなってくる。部活、クラブ始まるみたいな。それで、5 年生になれば委員会だっけ。

竹花：委員会。

畑中：委員会ってまた仕事が入って、仕事っていうか、入ってくるから。5 年生になって減るのもそれもあるのかな。

竹花：うん。

木原：じゃあ、平成 30 年度からは今の 4 年生 5 年生は別のクラブに

竹花：そうですね。

木原：この女子児童がやるようになってからも希望を取って、畑中君と同じような

竹花：同じような感じですね。人数調整を教師の方でしてやる。

木原：結構、みなさん一生懸命されてたんですか？畑中君みたいに第三希望だったりとか (笑)

竹花：いや、まーでもそうですね、第一希望で入るってよりは 2 とか 3 で入っている子

が多かったかもしれません。

木原：そうですか（笑）

竹花：正直な話、子ども達の感想としてですね、当時よく聞いたのは、「厳しい」って（笑）

木原：は一。

畑中：トミオさんが厳しいです。めちゃめちゃ厳しかった。

竹花：本格的に生活館とかで神楽を習っているのとは違うんで。でもやっぱりね、クラブはもう少し楽しくやりたいと思っている子ども達がいたみたな話は毎年聞きましたね。

木原：このクラブっていうのは、授業が終わって何時頃からされていたんですか？

竹花：3時頃からですね。

木原：時間は？

竹花：1時間くらいですね。

木原：それで厳しいと言われたら相当厳しかったんでしょね。

竹花：（笑）

畑中：週1だったかな。たぶん。

竹花：はい。木曜日のね、2時半くらいか。40分、45分くらいから。

畑中：それで覚えなきゃいけないから。

木原：鮫神楽、クラブは週1ってことなんですけど、他のクラブっていうのは

竹花：一緒です。

木原：一緒なんですか。

畑中：クラブ活動って時間があつたんですよ。

木原：今もそれは

竹花：ありますよ。たぶんうちの学校は昔から木曜日の6時間目っていう時間にいちおう、そのクラブ活動を

木原：放課後とかではない？

竹花：そうですね。一応授業の1つとして。

木原：授業ですか。

畑中：時間割に入ってます。

木原：そうでしたか。クラブって聞くとどうしても放課後にやっている、部活動ではないけどっていうことで。これは授業の一環だったんですか？

竹花：そうですね、はい。

木原：授業名とかあったんですか？

竹花：クラブ活動って。

畑中：時間割にある、算数、国語ってあって、最後にクラブ活動って入ってますよ。

竹花：授業時数には入らないんですけど、正式な授業時数には入らないんですけども、なので、ほんとに昔は授業時数に入ってた、年間35時間必ずやってくださいっていうようだったんですが、それが平成に入ったあたりからは、もう授業ではなくなっただけで、各学校でだいたい10時間とか13時間とかそれぞれの学校で設定できる。

木原：そうなんですか、じゃあ授業時間数に含まれていた時は結構やられてたんですよね、授業時間を確保しなきゃ。

竹花：まーそうですね、でも結構2000年前、1990年代の話ですね。

木原：じゃあ児童は授業が終わって6時間目になったら各場所に行って

竹花：活動している

木原：で、そこに鮫神楽の方々が来て教える。

竹花：うん。

木原：発表会は年に1回？

竹花：そうですね、だいたい11月末から12月上旬くらいに、クラブがある時にはね、発表会をしていました。全校児童が集まって。

木原：児童の皆さん、前向きにできてたんですかね。凄く緊張すると思うんですけど。

竹花：(笑)

木原：僕だったら耐えられない。

竹花：ご覧になってご存じだと思いますけど、鯨神楽は結構な尺がありますからね。いわゆる覚えるのも大変だけど、その緊張がね、小学生であの 20 分とか 30 分やってるのを見てると私なんかは凄いなと思いますよ。

木原：しかも 300 人くらいに見られてるんですよ。

畑中：僕も神楽やってて一番観客が多かったのが鯨小のクラブ発表会

竹花：(笑)

木原：間違えちゃいけないとか、そういうのってすごく苦だろうなと思います。

竹花：そうだろうねー。

木原：じゃあぜひ復活させてください。

竹花：(笑)

木原：すみません、ありがとうございます。

竹花：いえいえ。

鮫 神 楽

かつて、藩政時代、八戸藩の物資移出入港として栄え、海猫の燕島をのぞむ鮫に伝わるこの神楽は、修験者によって伝えられた山伏神楽の流れを汲むものである。鮫浦は諸国の船が入り出す藩の港として栄えた。神楽の特徴としては、この自由で開放的な鮫浦の土地柄から、神楽も山伏修験の手を離れて、神楽連中と呼ばれる船大工や漁夫たちの愛好者が中心となり、神楽の古式を守りながら、その形を崩さず、厳しく伝承を伝えると同時に、新たに歌舞伎物と呼ばれる組舞を考案し、民衆の娯楽として綿々と演じられてきたものである。

八戸藩日記の文化5(1808)年7月の項に、「鮫村の虎舞の者共を法靈神社の御祭礼のお供に加える…」の記述がある。また五頭現存する獅子頭のなかに、文化13(1816)年の墨書銘があり、嘉永年間(1848年～)編の台本があることから、鮫神楽の歴史は、それ以前から成立していたと思われる。

現在は、次の三十余種目が伝承されており、その内容は民族芸能を集大成したものと考えてよい。舞踊や民族音楽研究の面からも、見逃すことのできないものである。ただし、現状は、愛好者で編成される神楽連中の高齢化が進み、1971年以來、小中高中生を対象にした伝承会を実施しているものの、時代の変化は後継者難をおし進め、現在、連中・保存会が力を合わせてその打破のために悪戦苦闘中である。

演 目

- ★「四方堂権現舞」★「墓獅子」★「岩屏開」
- ★「式舞」＝「番楽」「鳥舞」「翁舞」「三番叟」「四季三番叟」
- ★「神舞」＝「山ノ神」「龍天」「普将荒神」「三宝荒神」「注連切舞」★「女舞」＝「機織」
- ★「武士舞」＝「志信太郎」「曾我兄弟」★「採物曲技舞」＝「剣舞」「盆舞」「小獅子」
- ★「組舞」＝「丑若丸鞍馬入」「五条橋千人切」「安宅関勅進帳」「壇の浦縁引」「恋路初旅志信」
 「四天王大江山入」「羅生門」「関の扉小松姫道行」「鐘巻道成寺」「笠松峠鬼人のおまつり」
 「葦屋道満大内鏡」「播州皿屋敷青山館の段」「息吹山百足狩」「朝鮮国加藤清正虎狩」

特色として「墓獅子」がある。これは、かつて各神楽で演じられていたが、明治政府の神仏分離令によって廃れ、現在は鮫神楽のみに残されている。まさに神仏混交の名残りをとどめるものとして全国的にも貴重なものである。もう1つ。古来日本で行われていた、歌によって死者を招き、歌によって死者と言葉を交わし、歌によって死者の成仏を表すという、歌が生者と死者による交流の媒体として、中心的な呪術的機能を果たしている形式も忘れてはならない。8月14日・15日、鮫の高台にある浮木寺の墓地で供養のために墓前で舞われる。

『墓獅子』 (掛歌)

インヨウホー東方はヤア薬師の浄土の玉の御構ヤ	君が開かて誰か開こふ～ヨ～ヤ～ハ
インヨウホー西方はヤア弥陀の浄土の玉の御構ヤ	君が開かて誰か開こふ～ヨ～ヤ～ハ
インヨウホー南方はヤア観音菩薩の玉の御構ヤ	君が開かて誰か開こふ～ヨ～ヤ～ハ
インヨウホー北方はヤア釈迦の浄土の玉の御構ヤ	君が開かて誰か開こふ～ヨ～ヤ～ハ
インヨウホー中央はヤア大日大悲の玉の御構ヤ	君が開かて誰か開こふ～ヨ～ヤ～ハ
インヨウホー茶の木にはヤアいかなる木の葉を取り揃えヤ	天から落ちる玉の水かな～ヤ～ハ
インヨウホー桜木をヤア打ち割り見れば何もなしヤ	花の種とは何を言ふらん～ヤ～ハ
インヨウホー白銀をヤア柄杓に曲げて水を汲むヤ	水をば汲まぬ白湯をこそ汲む～ヤ～ハ
インヨウホー酒呑まばヤア多くは呑むな少し呑めヤ	高天原の色に出るもの～ヤ～ハ
インヨウホー恋しさに～恋しき人の墓見ればヤ	涙で書いた石の卒塔婆よ～ヤ～ハ
インヨウホー恋しさに～我が古里を来て見ればヤ	変わらぬものは森と林よ～ヤ～ハ
インヨウホー恋しさに～恋しき人を来て見ればヤ	見るよりはやくしぼる袖かな～ヤ～ハ
インヨウホー立つときはヤア我れ老人とは思ひどもヤ	死出の参途は連れが多くぞ～ヤ～ハ
インヨウホー闇の夜にヤア啼かむからすの声聞けばヤ	生まれぬ先の父ぞ恋しき母ぞ恋しき～ヤ～ハ
インヨウホー極楽のヤア末木の枝には何がなるヤ	南無阿弥陀仏の六つの字がなる～ヤ～ハ
インヨウホー我が親はヤアいかなる悪非に我れをなすヤ	親をば問わぬ親に問わるる～ヤ～ハ
インヨウホー西見ればヤア 業 靈はたなびきてヤ	違ひなくは弥陀の浄土に 弥陀の浄土に～ヤ～ハ